

中京大学英米文化・文学会 春季大会特別講演会

「メイクアップ・ヘアスタイル史のなかの英国」
文化学園講師・元ポーラ文化研究所主任研究員 津田紀代氏

中京大学英米文化・文学会の特別講演会が、2017年7月11日午後1時10分より名古屋キャンパス5号館573教室で開催された。英語圏文化専攻3年生を中心に、外部からの参加者もまじえた約80名が、美しい画像のくりひろげられるスクリーンに見入り、細部に誘われて目をこらした。講演者は蒐集品で服飾史を物語るプロフェッショナルだった。

英国を世界史の表舞台に出したエリザベス1世女王から肖像画が読み解かれ、既視感のあやふやさが露呈するかのようだった。父の暴君ヘンリー8世も俎上にあがり、共通点が明かされた。父と娘のアウトフィットをかたちづかったのはDNAによるのではなく、その時代の必然であることを垣間見た。これが知ることだと再認識する。

次に着目したのは同じくパワフルな大英帝国女王ヴィクトリア。在位期間は永きにわたったが、夫君アルバートに先立たれ、その寡婦としてのあり方が過去の〈流行〉といかに決別することになったことか。控えめ地味めの装いが品格や高位をあらわすデフォルトとなった経緯が明かされた。対比して、財をなしたブルジョワジーが牽引する華やかな流行。「目まぐるしく変化する」という言葉を津

田講師はくりかえされた。たしかに新興階級のパワーがファッションを侵すかのように感じられた。

現代のファッションに引き継がれることのなかった流行の数々は、記憶に残すべきなのだろう。星形・月形もある「つけぼくろ」や、馬車の座席をはずさないと乗りこめないほどの「盛り髪」、踊れないほど裾がひろがるスカートや健康に悪いほど極端なコルセットなど。Sartor Resartus —— あらためつけられる装いに注視はつづく。それが人の営みであるからだろう。

(中京大学国際英語学部国際英語学科英語圏文化専攻教授
岩田託子)